

徴候の中で生きる人々への「保健指導」

－ 生活に根差した健康をめぐる対話をもとにして －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
川野 絵梨

保健指導では、実施率が低く、予防への意識の低さが問題視されているが、受診者側だけでなく、政策と指導者側の要因も存在する。

本研究は、徴候を通し、生活に根ざした保健指導のあり方を探求する。特に、個人の生活や健康観に焦点を当て、対話の重要性に注目する。

対象者は、仕事上関わった方6名である。方法は、非構造化面接を実施し、インタビューデータの関連ある項目から概念を生成し、それらをカテゴリー化する中で分析と考察を行った。

21個の概念からなる4個のカテゴリーが生成された。この中で、①対象者が政策に管理されている健康の現実を捉えつつ、自らに合った形でそれを取り入れていること。②日常生活を知ることにより、保健指導の場で対象者が示す多様な反応に潜む意味が示唆されること。③個々に生じた苦難をそれぞれに解決していることがその人の強さやしなやかさ、そして、今あるユニークな姿に繋がっていること。④その人の核心に繋がる徴候は多様な形で表れており、一貫性を理解することで全体像が理解できること、また、理解が人としての尊厳に繋がりが、指導者側に寛容をもたらすとともに、両者の信頼関係の構築に繋がることが示唆された。

健康感覚を糸口に、核心に至る徴候から対象者が真に望む健康を探り当てることが不可欠である。そのためには、対話を通し、相互理解と信頼を深め、健康への協働体制を構築し、個々人に即した保健指導を心がけることが重要である。